

第 12 回哲学研究会

1. 日時：12 月 22 日（土）午後

2. 場所：田中記念館 2 階 会議室

3. タイムテーブル：

13:00～13:50 大畑 浩志 「このもの性の哲学：形而上学から愛情の哲学まで」

13:50～14:00 休憩

14:00～14:50 高野 保男 「なにかが『日常的である』とはいかなることか：ウィトゲンシュタイン的視点から」

14:50～15:00 休憩

15:00～17:00 福田 宗太郎 「プラトンにおける知と思わく：『メノン』『国家』『テアイテトス』を中心に」

* 上記発表時間は質疑応答を含む。

4. 発表要旨

(1) 大畑 浩志 「このもの性の哲学：形而上学から愛情の哲学まで」

世界にはたくさんの性質がある。ものの色やかたちといった身近な性質はもちろん、電子のスピンのような物理学で発見される性質から、優美さや正しさのような価値にかかわる性質もある。哲学者たちは 2000 年以上前から、実際に存在する性質とは何か、性質とはそもそもどのようなものなのかということを考えてきた。そのような歴史の中で、中世ヨーロッパの神学・哲学者であるドゥンス・スコトゥスや、18 世紀の哲学者ライプニッツは、「このもの性」と呼ばれる性質が存在すると主張した。このもの性とは、ある個物のアイデンティティそのものを担う性質であり、「自分自身と同一であるという性質」といった形で表現される。このもの性はとてもミステリアスな性質でありながら、現代でも少なくない哲学者がその存在を支持しており、今なお論争の的となる性質である。

本発表では、このもの性の存在が擁護される。ただし、従来のように形而上学

の議論からではなく、情動の哲学からのアプローチを試みたい。とりわけ、愛情が情動として考えられた際の障害となる、ドッペルゲンガー問題の解決策としてこのもの性の有用性を検討したい。私は、これまで提案されてきた愛情の理論を提示した上で、愛情は人の性質を理由とする情動として考えられるべきであり、その性質にはこのもの性が含まれうると主張する。

(2) 高野 保男 「なにかが『日常的である』とはいかなることか：ウィトゲンシュタイン的視点から」

我々が営む多種多様な実践は、それが日常的であるか否かによって二分することができるように思われる。たとえば、「食事をとること」は多くのひとにとって日常的であるといえるが、「エベレストに登ること」が日常的となっているひとはおそらくほとんどおらず、「月に行くこと」は有史以来誰にとっても日常的な実践とはなっていない。

本発表が考察するのは、生命維持に必要なものから文化的なものまで多種多様な実践において、それらを日常的なものとそうでないものに分ける線引きである。そして、本発表ではそのような考察を後期ウィトゲンシュタイン哲学の助けを借りながら行いたい。

とはいえ、ウィトゲンシュタインは日常性概念についての哲学的専門家では決していない。むしろ、哲学をしないことの別名として日常実践を重視したのがウィトゲンシュタインであるといえる。本発表では、このようなウィトゲンシュタインの（反）哲学観を利用し、日常実践の対極に位置する哲学的思索を特徴づける要素（と彼が考えるもの）を手がかりに、多種多様な実践における日常性と非日常性はいかに区別できるのかを考えていくこととする。

(3) 福田 宗太郎 「プラトンにおける知と思わく：『メノン』『国家』『テアイテトス』を中心に」

単に信じていることと、知っていることの違いは何か。この問いは伝統的に認識論の問いとされてきた。現代の認識論では、知識は「正当化された真なる信念」であるという定義が伝統的な知識定義だとみなされ、議論の対象となってきた。単に信じていることが真であるだけでは、たまたまかもしれない。そのため、そのように信じていることが何らかの仕方で「正当化」されていなければならない。それでは「正当化」とは何なのか。この知識定義を定式化すると同時にその問題点を指摘したことで、その後の正当化をめぐる論争の火付け役となったのは

Gettier(1963)である。Gettier は、有名な論文の注の中で、プラトンはこの定義を『テアイテトス』において検討し『メノン』においては受け入れているように思われると述べている。プラトンは Gettier が指摘しているように、知識は「正当化された真なる信念」であると考えていたのだろうか。

本発表では、プラトンの『メノン』『国家』『テアイテトス』といった中期から後期にかけての著作を中心に、プラトンが知と思わくという異なる認識のあり方をどのように考えていたのか論じる。古代哲学の研究は、その時代時代の「現代」哲学の影響を受けている。プラトンの認識論研究も例外ではなく、Gettier 以後の認識論において提示された様々な立場との比較がなされてきた。たとえば知と思わくについてのプラトンの見解を、現代における知識の因果説や徳認識論的な立場に類似したものだと主張する論者もいる。本発表では知と思わくについてのプラトンの思考と現代の認識論との比較も行い、プラトンの認識論研究の現代的意義にも触れる。